

(4) 北湖湖底の低酸素化

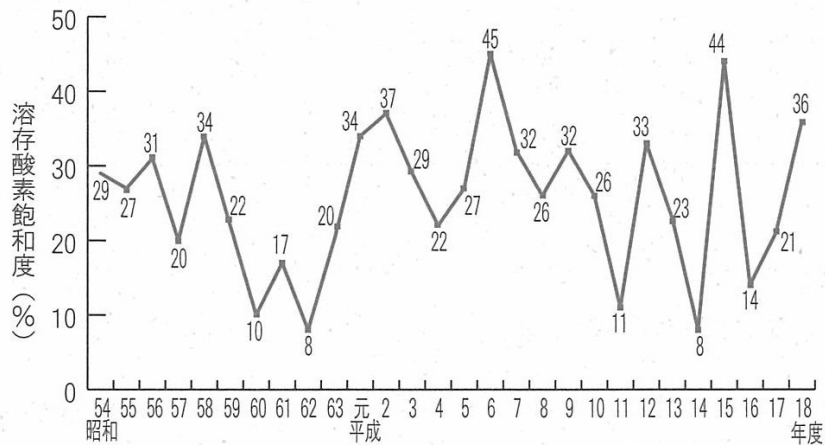
北湖の湖底では、成層期に底泥や沈降した有機物が分解されることにより水中の酸素が消費され、溶存酸素濃度の低下が起こる。

水質観測地点の中で最も水深の深い今津沖中央の底層付近における溶存酸素飽和度の年最低値は、昭和54年度から平成18年度までの28年間において8～45%の範囲で変動し、近年では平成14年度に8%の最低値を記録している。

湖底の溶存酸素濃度が減少し、還元状態になると、底泥中から栄養塩類等の溶出現象が起きることが知られており、北湖湖底付近および湖全体の環境悪化が懸念される。

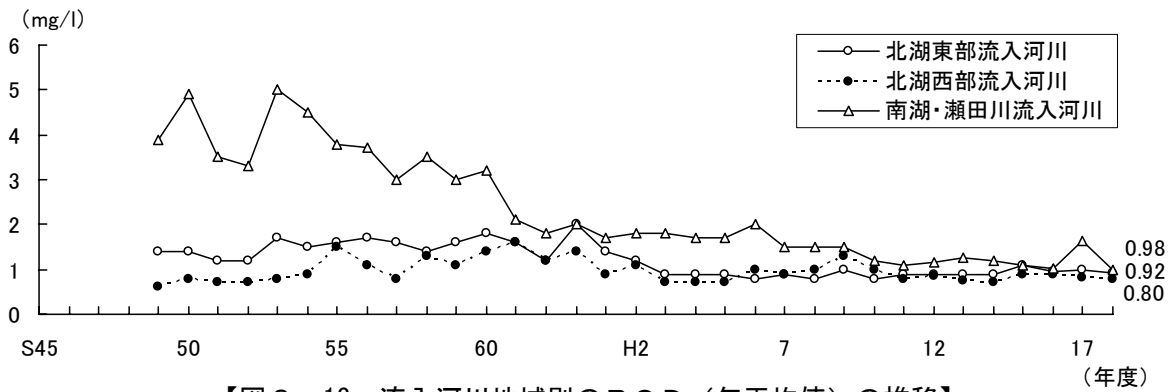
また、北湖では毎年1～2月ごろ、湖面が冷やされるなどして、酸素を多く含んだ表層の水が沈み、深層の水と混じり合うことで溶存酸素濃度を回復する「全循環」が行われる。しかしながら最近では循環時期が遅れる傾向にあり、暖冬であった平成19年は3月上旬になっても全循環が確認されず、深層の溶存酸素の濃度回復が進まない状況であった。

その後、深層の溶存酸素濃度は3月末になってもほぼ回復したが、今後も温暖化の進行に伴い暖冬傾向が強まると、同様の現象が起こる可能性があると考えられている。



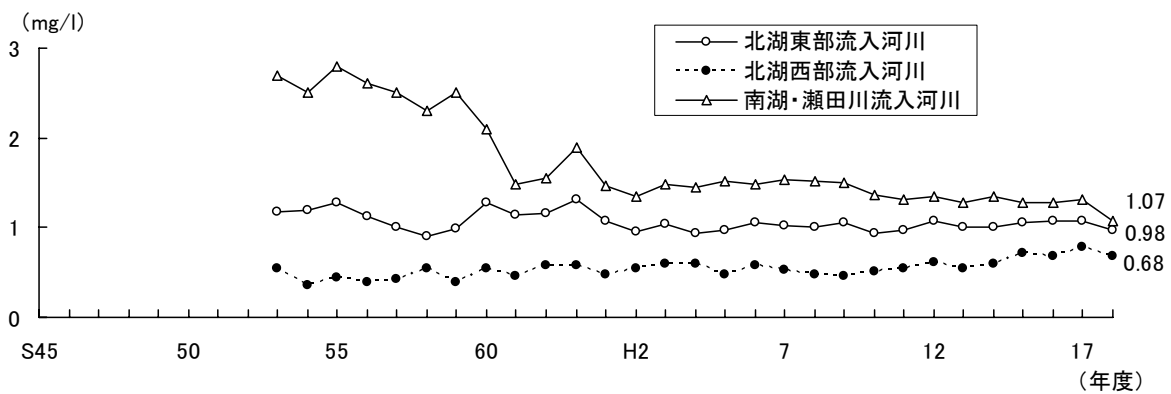
【図3-12 溶存酸素飽和度年度最低値の変動（今津沖中央、底から1m）】

出典：滋賀県「平成19年（2007年）版 環境白書」



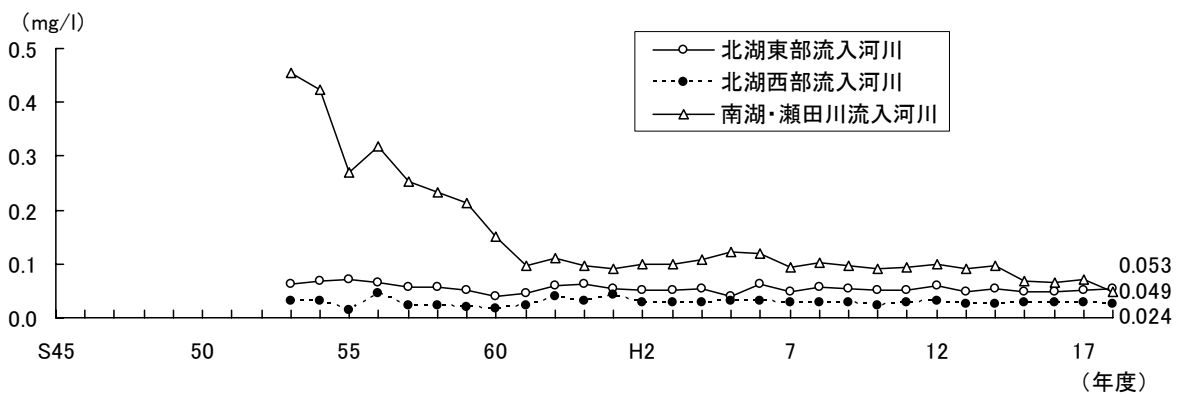
【図3-13 流入河川地域別のBOD（年平均値）の推移】

滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-10を参照



【図3-14 流入河川地域別の全窒素（年平均値）の推移】

滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-8を参照



【図3-15 流入河川地域別の全りん（年平均値）の推移】

滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-9を参照